

絶対的な信頼が結ぶ、

古都の赤い果実

たつみ ゆうすけ
異祐輔

(31歳)

| 葛城市脇田 |



かこの選択が、その後の人生を大きく変える事になるとは、その時は思ってもいなかった。

「師匠」との出会い。 そして絶対的な信頼へ

研修先は、当時、奈良県で新たに開発されたイチゴ「古都華」の「育ての親」として注目の存在だった、平群町の辻本忠雄さんの農園。「イチゴの作り方を教えてもらえば」程度の思いで赴いた異さんだったが、辻本さんの農業に関する物の見方、考え方、栽培方法や売り先の獲得方法など、斬新なやり方には目を見張るものがあり、辻本さんの元での研修にのめり込んでいった。



辻本さんは、苗の育て方、高設栽培のシステム、水や肥料の種類や量から売り

先の確保方法まで、すべてのノウハウを惜しみなく伝授してくれた。1年間の研修を終える頃、辻本さんを尊敬の念を込めて「師匠」と呼び、「イチゴの専業で食べていける。大丈夫！」と太鼓判を押す師匠の言葉に、それまで続けていた稲作も野菜作りもやめて、自分も古都華の専業農家になることを決意する。

「師匠と話していると、自信しか生まれてこないですよ。絶対的に信頼していますね」。こうして、異さんの専業農家としての人生が始まった。

難しい作物も、やり方 ひとつで結果は出せる

奈良県を代表する新しいイチゴとして注目を集める古都華だが、普及への道のりは平坦ではなかった。艶のある鮮やかな赤色の果皮、芳醇な香り、強い甘さを特徴とし、平均的なイチゴの糖度が11度前後であるのに対し、古都華は15度を上回ることもある。口に入れた瞬間の美味しさは全国のイチゴの中でも随一と異さんは胸を張る。一方で、一株の果実数が少なく、作る人によっては収穫量が他品種の半分程度しかないという決定的な欠点もあった。

申し分のない味の良さの反面、収益性がとても悪かったことから、当初、古都



兼業から専業へ。

突然訪れた転機

葛城山のふもとでイチゴの栽培に力を注ぐ異祐輔さん。祖父の代まで菊農家だった実家は、会社員の道を選んだ父の代で、休日や空いた時間で田畑の世話をする兼業農家に移行し、異さんも子供の頃から農業を手伝ってきた。

会社勤めになっても、週末や大型連休に農業をしないといけない日々。休みを満喫する友人達を、うらやましいと思うこともあったが、二十歳を過ぎるころには、祖父や父が引き継いできた農地を自



華を栽培したいという農家はほとんどなかったという。そのとき、古都華ならではの作り方、売り方の模索に力を尽くしたのが師匠の辻本さんであり、それを継承する農家の一人が異さんだ。

「美味しい作物を作れても、それを販売し、利益を出せる道筋がないとだめ」と異さん。専業に切り替えた当初に4棟だったハウスは現在7棟になり、来年にはさらに3棟増設を予定するまでになったのも、「やるべきことをやれば、ちゃんと結果はついてくる」という師匠の言葉を信じて仕事に邁進した結果だ。

紅白のイチゴに込めた

夢と希望

現在異さんの元では、古都華の他にもうひとつ別のイチゴが育っている。「淡雪」という名の、熟しても赤くならず、白に近いほんのりピンク色をしたイチゴだ。県内では、異さんと辻本さんだけが栽培権を持つこの珍しい品種は、赤色の濃い古都華と並べると華やかさが増し、

分の代で無益にするわけにはいかないと、長男としての責任を感じ始めていた事も覚えている。とは言うものの、それはあくまで兼業農家として。

農業を本業にする日が来るなど考えてもなかった異さんに、転機は突然訪れた。兼業農家を始めて何年か経った頃、県の新規就農希望者を対象にした研修事業を知った。県内の先進的な農家である「指導農業者」の元で1年間研修ができること、改めて農業を学ぶ機会にしたいと、利用してみることに。育てたことのない作物だったから、という理由で指導を受ける作物にイチゴを選んだが、まさ

二つをセットにした「紅白のイチゴ」として進物用やお祝い用に引つ張りだかどという。

「自分で作ったものを、自分で売ってお金を稼ぐというのが面白いし、やりがいがある。仕事と言うより生きがいですね。だから休みたいとも疲れたとも思わない」。兼業から専業になって変わったことは、という問いにそう即答した異さん。夢はさらに広がる。ひとつは「紅白のイチゴ」を日本全国、さらには海外にも広げること。昨年に香港で販売した際には大きな反響を得て、自分のイチゴが海外でも通用すると自信を持った。もうひとつは、自宅と畑の近くでイチゴカフェを開くこと。妻や母にも手伝ってもらい、自分のイチゴをふんだんに使った、イチゴ農家ならではの贅沢なメニューで訪れる人を喜ばせたいと、希望は膨らむ。師匠を信じ、自分を信じて、異さんのイチゴ農家としての道は広がっていく。

